

(22) 野州(やしゅう)鉾山跡一追記

GPSであるガーミンで本鉾山探査の経路ログを得るために、久しぶりに野州鉾山跡を訪れた。現地は11年前と殆ど変わることにはなかった。当日2組のグループと会合した。それなりの愛好家達が本鉾山跡を訪問してはいるのであろう。

2020年4月



図1 水色がガーミンの経路ログ曲線である。塩谷町の461号バイパス線にあるA点は道の駅「湧水の郷しおや」である。ここから北側にある旧道に入り、土佐川に沿って北上して行く。赤丸が現地。ついでながら、上部の東荒川ダムの所にも赤丸を付けている。この公園で、実に上手い水である尚仁沢の名水が自由に採水できる。折角近くに来るのであるから、大きなポリタンクを持参してくることを勧める。水は数ヶ月以上日持ちがするそうである。



図2 図1の部分拡大図。A点が道の駅。旧道のB点かC点で土佐川に沿って北上して行く。村道は途中から林道となる。が、現地より先まで舗装されている。

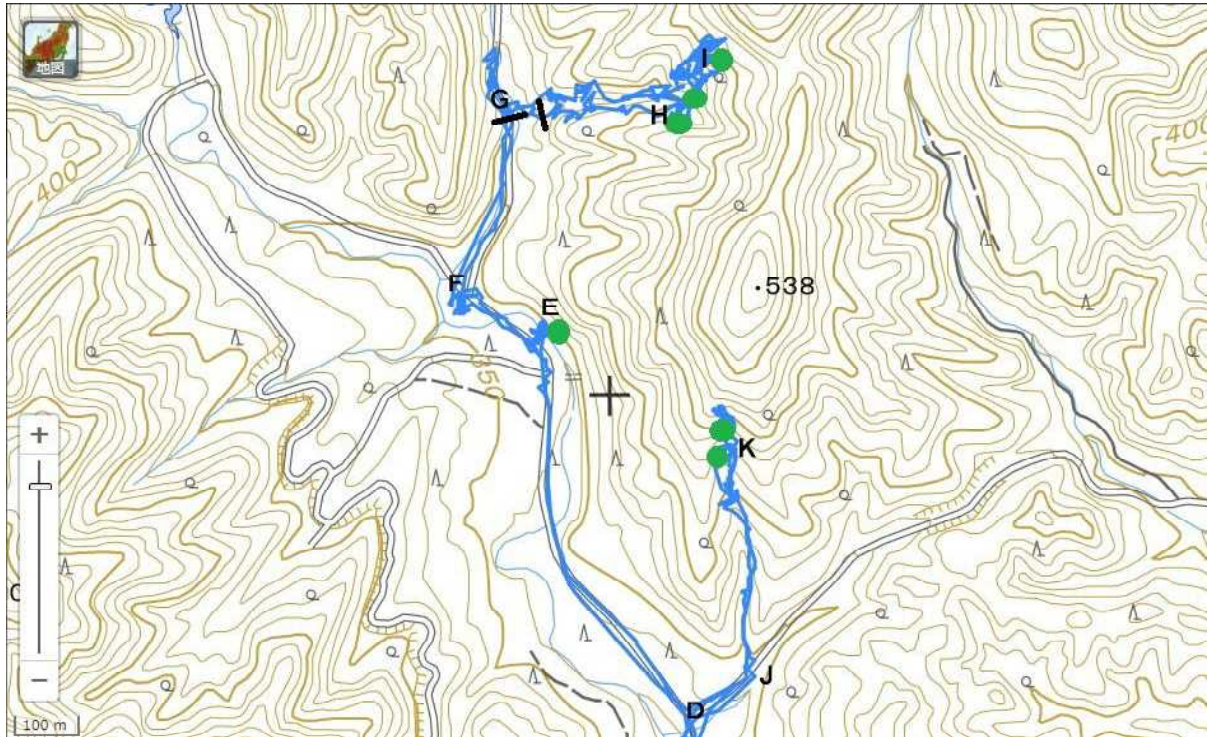


図3 図1の現地近傍の部分拡大図。黄緑丸が坑口跡。F点よりG点先まで車で行けるが、F点に駐車し、そこから歩いた。黒線分は砂防ダム。G点で砂防ダムを横断し、右手の沢に入るが、直ぐに次の砂防ダムがある。このダムを向かって左側から乗り越えた。広く緩い沢に出た。転石が結構あるが、努力しないと良好石は見つけれないであろう。沢を登り上がってのH点とI点付近に坑口跡。所変わって、沢の対岸であるE点に坑口跡。D→J→Kと進み、2カ所に坑口跡。

鉱山跡写真



写真1 F点である。車は左側の藪地に駐車。右手、北東方向に伸びている林道へ徒歩で進んだ。

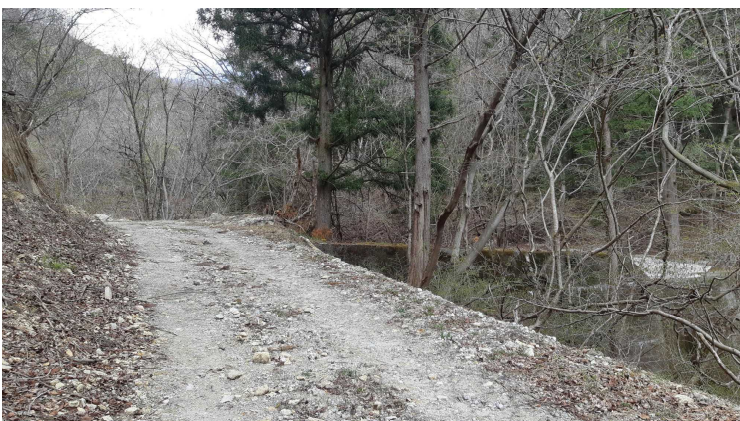


写真2 G点である。右手の沢に砂防ダムが見えている。ダムはほぼ土砂で満杯であるので、容易に対岸に渡れる。対岸に渡って、右手にある沢に進み入る。直ぐに別の砂防ダムがあり、ダムに向かって左端から、ダムを乗り越える。



写真3 乗り越えた砂防ダムの付近から沢の上流を見ている。沢は広くなだらかなである。



写真4 沢の途中にあったズリの崩壊部。



写真5 H点付近。沢の左岸にあった広い空き地状のプラト一部。後ろ側に坑口跡がある。

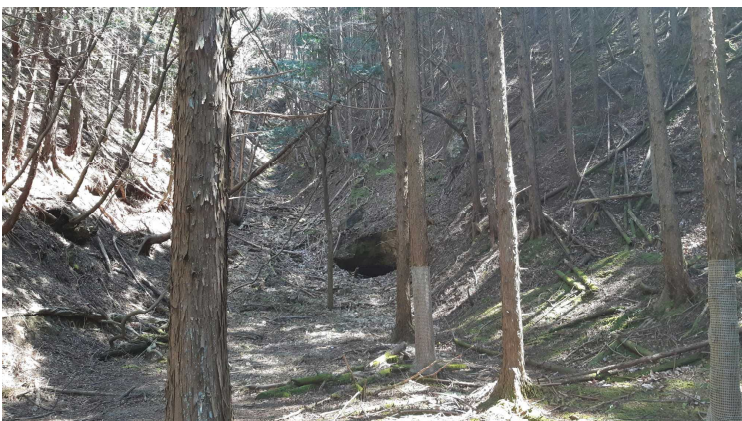


写真6 写真5のプラト一部の奥にあった坑口跡。中央の黒い部分。



写真7 写真6の坑口の入口部分から内部を覗く。



写真8 沢を更に少し上流に登って来た。沢の左岸の沢床付近にあった坑口跡らしい所。大きな丸石の脇の右側部分。殆ど埋まりかけていた。次の写真を参照。



写真9 写真8で紹介している黒い部分に接近しての一様。入口付近は埋まりかけているが、奥は深い、確かに坑口跡である。



写真10 写真8、9で紹介している坑口跡から沢は少し急傾斜となるが、沢のどん詰まりにあった坑口跡。I点付近である。



写真１１ 写真１０で示している坑口に接近しての内部の一例。



写真１２ Ｉ点付近の沢の様子。下から坑口の方を見上げている。一帯ズリ、転石だらけである。



写真１３ Ｆ点に戻り、歩いて林道を下る。Ｅ点付近である。林道から左手の林の奥、沢岸に「黒い点」が見える。坑口である。



写真１４ 写真１３で示した坑口跡に接近しての一例。目の下の沢の水が深い。坑口の周りの斜面は結構急である。周りを見たが、巻き道もなさそうであった。坑口に登り上がるのを断念した。渇水期なら、大丈夫かも知れない。遠視だが、坑口の入口付近に坑木が見えていた。



写真15 車でD点まで戻り、ここから徒歩でD→J→Kと進んだ。K点手前で、進んでいる林道の前方を見ている。中央の木立のあたりに2つの坑口跡がある。



写真16 1つ目の坑口跡。



写真17 入口から覗いたその内部の様子。



写真18 2つ目の坑口跡



写真 1 9 入口から覗いたその内部の様子。



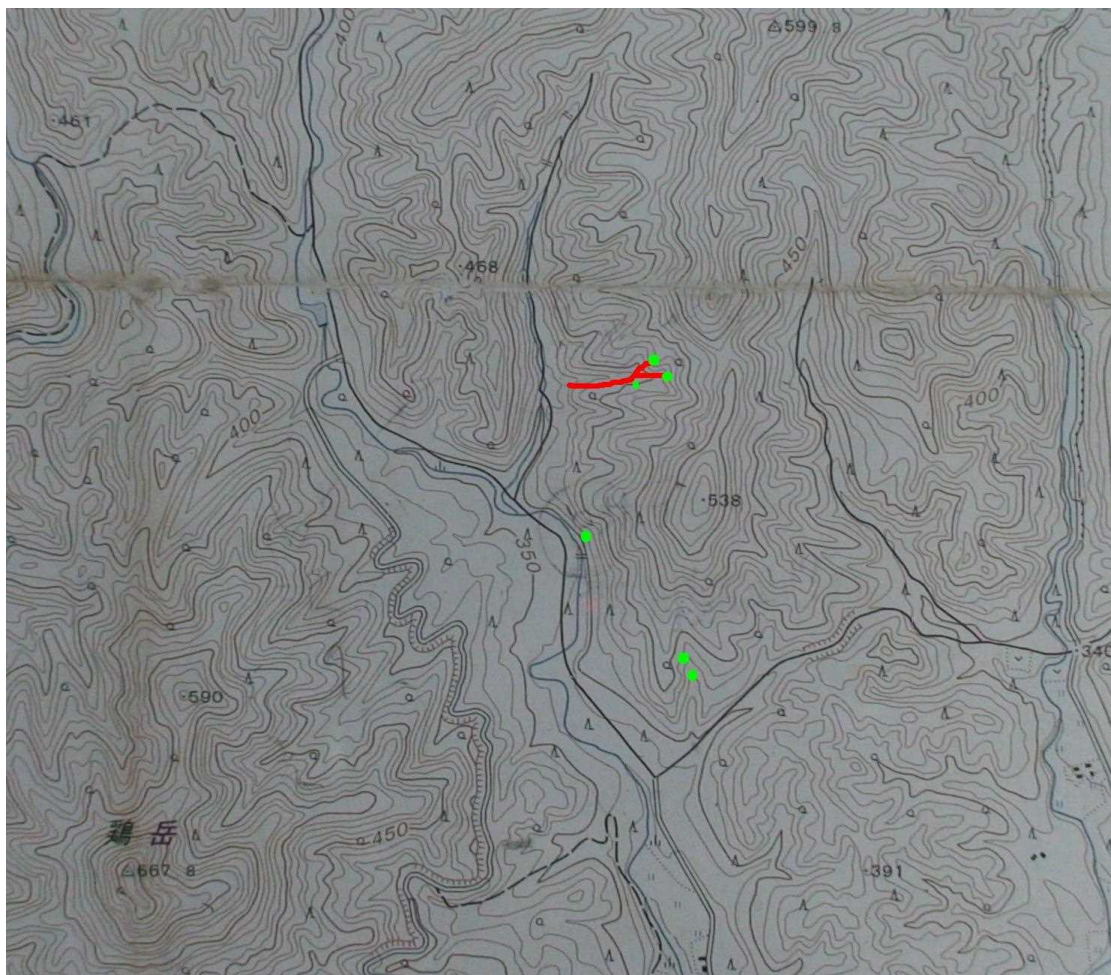
写真 2 0 2つの坑口跡付近から登ってきた林道を見下ろしている。

(22) 野州(やしゅう)鉾山跡

参考文献(1)によれば、この鉾山の鉾石は黄鉄鉾、黄銅鉾を含有する石英脈である。地質調査所を訪問し、図書で栃木県塩谷町付近の地質図を閲覧することができた。地質図には、数十以上の鉾山の位置が明記されていた。この地質図を手引きに、まず野州鉾山の探査を行った。461号線を舟生地区で、土佐川に沿った道を遡る。ほぼ真北に、約5km舟生(ふにゅう)地区から進んだところに、左手に適当な広さの駐車スペースがある。地形図中の真ん中当りの林道の三叉路の箇所である。登ってきた林道は直進しているが、右側に車も通行できる分岐道がある。この道を先に進むが、ここから歩いて探査に向かうことにする。

林道を沢を左にして進んでいくと、沢は右下となり、登り口から300m程で、右前方に砂防ダムが見える。注意して右の方を見ると分岐したわわの入り口に別の砂防ダムが見える。この砂防ダムの上からが、採集箇所であり、地形図中の赤線の沢である。前者の砂防ダムは完全に土砂で埋まっているので、簡単に横断できる。横断したら後者の砂防ダムを目指していく。砂防ダムに向かって左の山側からなら登り超えられよう。地形図中の赤線の端の位置に立てる。後は、沢中の赤線に従って、自由に鉾物探査が行えよう。以降に、沢中の様子と、沢の上部に見かけた坑口の写真を示しておこう。

地形図中の緑丸は、筆者が確認できた坑口である。歩き始めた地点から、林道を車で来た方向に約200m戻った川の対岸にも立派な坑口がある。砂防ダムの記号の記してあるところの緑丸の位置である。更に林道を下っていき、細い林道2本と太い林道1本の交差しているところで、東に向いている林道を約200m進むと左手に沢がある。この沢に向かって、右側に林道がある。登っていくと幾つかの坑口がある。地形図中の下の2個の緑丸の箇所である。確実に標本を採集できるのは、赤線の所である。坑口の配置からすれば、538mを頂上とするこの山一体に鉾脈があると思われる。他の所にも坑口やズリがあると思う。今後、再三探査を行いたい鉾山跡である。



赤線の沢中にズリが多い。緑丸は坑口。

地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図「玉生」

探査日 2009年3月、その他の日

参考文献

(1)「日本地方鉾床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。

鉾山跡写真



三叉路の箇所である。現在では、舗装直線道路と側道となっている。舗装道路の右側が南。写真正面の林道を進む。



進んでいくと林道の右側に砂防ダムが見える。この辺りで、沢の右側を良く見ると、別の沢があり、別の砂防ダムがある。この砂防ダムの上が野州鉾山のズリが良くある沢となっている。まず写真に見える砂防ダムを渡り、沢の右側に進む。なを、この砂防ダムは完全に土砂で満杯となっている。先に進んで行くと、進行方向の右側に沢があり砂防ダムがある。この砂防ダムを左側から乗り越え、地形図中の赤線の左端に達する。



沢の様。上方にマウントが見える。



沢の様。転石などがたくさんある。



沢を登り詰めた所にあった坑口。断面積は結構大きい。坑口の周囲は急峻な崖である。



これも坑口である。坑口の左側に沢が伸びている。地形図中の鞍部に続いているものと思われる。古い地質図には、この沢は林道としての記号が記されている。



地形図中の真ん中の緑丸で示した坑口。右側に砂防ダムがあり、水がたまっている。少し深いが渡れないことはない。



地形図中の下の2つ緑丸の内の1つの坑口。周りにも幾つかの坑口がありそうである。めぼしいズリはなかったが。

1
あ
つ

採集鉱物写真

それほどでもないが、採集品の幾つかを紹介する。水晶、少し紫水晶擬きのものと、黄銅鉱、黄鉄鉱である。じっくり時間をかけて採集すれば、良品を得ることは十分可能であろう。

品名	紫水晶（別名 アメジスト）	水晶に鉄などの不純物が微量に混入して着色しているもの。
化学組成	SiO_2	
色	透明、薄紫、ピンク、様々	
光沢	ガラス光沢	
条痕	白	
比重	2.7	
硬度	7	
結晶系	六方晶系	
劈開	なし	
共生鉱物	元々石英なので各種多彩	
解説		

品名	黄銅鉱	重要な銅資源
化学組成	CuFeS_2	
色	金色	
光沢	金属	
条痕	緑	
比重	4.2	
硬度	3.5	

結晶系 正方晶系
劈開 なし
共生鉱物
解説

品名 黄鉄鉱 重要な鉄資源

化学組成 FeS_2

色 真鍮黄

光沢 金属

条痕 緑黒～褐黒

比重 5.0

硬度 6

結晶系 六方晶系

劈開 なし

共生鉱物 石英、磁鉄鉱、緑泥石

解説 塊状、六角形板状の微結晶の集合体などで産出。



左半分はピンク色の紫水晶の微晶群



右上に紅がかった紫水晶がある。



大きさ1 mm以下の小さな立方体結晶（金色）の集まった黄鉄鉱



金色に輝いている部分が黄銅鉱